

国内大規模 2 型糖尿病レジストリデータを用いた高齢者の血糖管理と SGLT2 阻害薬の効果の検討

糖尿病の頻度は加齢に伴って増加しており、令和 4 年の「国民健康・栄養調査」による「糖尿病が強く疑われる者」割合は 70 歳以上の男性で 18.1%、女性で 9.1%となっている。高齢者糖尿病では成人と比較して細小血管症(網膜症、腎症、神経障害)や動脈硬化性疾患の頻度が増えることが明らかになっており、食事・運動・薬物療法によってこれらの合併症を予防することが治療の目標となる。高齢者糖尿病においても成人と同様に血糖管理が血管合併症の発症予防に有効である。高齢者糖尿病における血糖管理目標は高齢者の糖尿病診療ガイドラインで定められており、過剰な血糖管理によるリスクから成人よりも緩やかな目標値が設定されている。また、血糖管理目標の設定にあたっては認知機能や ADL、併存疾患に基づいたカテゴリー分類を行うことが ADA や IDF 等のガイドラインで推奨されており、日本のガイドラインもこれらに則っている。しかし、高齢糖尿病患者のカテゴリー分類および血糖コントロール目標はエビデンスに乏しく、専門家の意見に基づくガイドライン策定にとどまっている。平均寿命の長いわが国では糖尿病を抱えながら長く生活を送る患者は多いと考えられるため、血管合併症を予防する血糖管理は特に重要である。

血糖コントロールを介さずに血管合併症を予防する新たな方法として、2014 年に発売された SGLT2 阻害薬がある。SGLT2 阻害薬は当初は血糖降下の目的で承認されたが、近年では血糖降下作用と独立した心血管保護作用と腎保護作用を持つことで注目されている。高齢糖尿病患者に対する SGLT2 阻害薬の心保護作用、腎保護作用について、高齢者に限定して効果を検討した研究は数少ない。高齢者はその脆弱性からランダム化比較試験には含まれにくく、高齢者に限定したランダム化比較試験を行うことも困難であるため、リアルワールドデータを活用した SGLT2 阻害薬の効果の検証は意義が大きいと考えられる。

本研究では国内のかかりつけ医に通院する糖尿病・高血圧患者の症例レジストリである J-DOME のデータベースを使用する。抄読会では現段階での解析結果と考察、今後の展望について述べる。

【参考文献】

1.Rooney MR, Tang O, Echouffo Tcheugui JB, Lutsey PL, Grams ME, Windham BG, Selvin E. American Diabetes Association Framework for Glycemic Control in Older Adults: Implications for Risk of Hospitalization and Mortality. Diabetes Care. 2021 Jul;44(7):1524-1531.